

# 芦花とキリスト教的ヒューマニズム

和田洋一

『思出の記』の主人公菊池慎太郎が、まだ幼い子供であつたころ馬子の新吾は、「坊ちゃん、エライ人に御なんざい、御なんざい、なアに人がどうしたって構ふもんか、エライ人になつて皆に御辞儀させて御遣んなさい」といつてはげます。氣性の烈しい慎太郎の母は「おまえは水呑百姓の子と遊んで、水呑百姓になつて、それで一生腐つてしまふ積りかい。菊池の家を潰した上に亦潰して、それでいいと思ふかい。口惜しいとも思はんか。慎太郎、何故黙つとる……」と気合を入れる。

どん底にまで落ちぶれた士族のせがれ慎太郎は、菊池家再興の重い責任を負わされ、中西西山先生の塾で勉学の道を志すことになる。

青野季吉は、自分たちは若いとき、『思出の記』によつて大いに青年の夢をそそられたことを指摘し、それは菊池慎太郎という意想的な人物が、芦花によつて創造されたからだと述べている。たしかに慎太郎は意志的な人物で、エライ人になろうとして苦学力行するが、しかし、人がどうなつたって構うものかという風な生き方はしない。

彼は西山塾から育英学舎に変り、西欧の自由主義の思想、人権尊

重の思想にあれ、さらに神戸の関西学院に入學して、寮生としてキリスト教の雰囲気の中で生活するようになる。学校の中でリバイバル（信仰復興）という現象が起つて、上級生たちが狐つきみたようになつて、無暗と祈つたり泣いたりし、彼のクラスの過半の者が、この病に伝染する。しかし彼自身は理性的な態度で、この気狂いじみた運動を白眼視している。とかくするうちに彼の心の中に、じだいに信仰の光が射しはじめ、彼の考え方はずっかり一変してしまふ。名譽だとか、黄金だとか、学位、勲章、地位、勢力、そうしたものが玩具の線香花火のように空しく思われ、自分は今まで「人」を最後の判官とし観客とし、人の眼の前に菊池慎太郎を輝やかすことを目的としていたが、今は人を指いて直ちに「神」の前に立つ身だと感ずるようになる。

彼は、ザビニー、ヘンリー・マアチン、リビングストーン等の宣教師の伝記を読んで深く感激し、自ら聖書一冊をかかえて、岡山県へ伝道におもむく。そして会堂の中で、福音を熱烈に説くだけでは満足せず、貧民窟に乗りこみ、未解放部落（原本では〇〇村となつてゐる）を訪問する。彼は「悪臭をうがち、汚穢をくぐり、ぼるに

まじり、癩病の女にも“貴君”といつて信仰をすゝめ、皮臭い〇〇の手を握っては“兄弟”と呼んだ。……」そして日記の一節に、次のような言葉をのこす。

「……あゝ社会は此憐れむ可き輩を容るゝの余地なきや。法律は唯富者強者をのみ護するの器なりや。彼等は世に生れて、樂を知らず、苦んで生れ、苦んで生き、また苦んで死す。彼等は心の樂みを知らず、彼等若し不徳の行ひあらば、是れ彼等の罪にあらず。

萬軍の主エホバの神、願はくば彼等を憐れみ給へ」

しかし彼は後になつて、自分の行為が、先方の利益を思うよりも自分の私情を満足さすだけの仁恵にすぎなかつたこと、惡質ではなかつたにしても、幼稚であったことを認めて反省する。もちろん伝道師として一生をつらぬく決心に交りはないが、あと半年で関西学院を卒業という時期に、彼の尊敬していた菅先生がアメリカ人の宣教師たちの圧力によって学園を追放されるという事件がもち上り、彼は、ふんまんやる方なく、単身宣教師の不寛容、横暴にプロテストする。そしてその結果は彼自身学校から身を引かねばならないことになり、退学届を出して上京し、苦学しながら帝国大学への入学準備をはじめる。

「思出の記」の作者は、小説の主人公慎太郎が、菅先生に対する同情から出発し、宣教師の狹隘な感情の犠牲となつたと感じ、キリスト教の公義を維持せんとしてたおれた一種の殉道者のような積りでいたが、しかし彼の内部では、信仰の火は徐々に消えかかつてい、伝道師になろうという決心も可成危なつかしいものになつていて、それを、説明として附け加えている。そして事実、関西学院をはなれ、東京にきてからの彼は、キリスト教と疎遠になつてゆくばかりである。

りである。

小説の後半の部分、慎太郎が東京へ移つてからの生活の叙述は、全体の五分の二の量にあたるが、前半だけではなく、キリスト教と直接結びつきのない後半を通じても、慎太郎の生活なしし作者の態度は、キリスト教的ヒューマニズムによつて、つらぬかれていると言いくことができる。

幼いころ、馬子の新吾に、人がどうしたつて構うもんか、エライ人になれ、エライ人になつてみんなに御辞儀をさせてやれ、とすすめられ、母親からは、お前は水呑百姓の息子じゃないんだ、とはっぱをかけられながら、彼は利己的な立身出世の道を歩もうとはしないし、水呑百姓や貧民窟の住人や未解放部落の人たちを、人種のちがつた人間として高い所から見下すようなこともしない。彼がキリスト教を知る以前に、育英学舎で受けた精神的、思想的感化も、もちろん大きいことは認めねばならないが、青年慎太郎の行動なり生活なりをつらぬいているものは、やはりキリスト教的ヒューマニズムだと思う。

しかしキリスト教的ヒューマニズムは、キリスト教の信仰、福音的信仰そのものとはもちろん別である。勝本清一郎は「芦花とキリスト教」と題する論文（『文学』一九五六年八月号所載）の中で、芦花のキリスト教が本物でなかつたことを強調している。それはそれでいい。しかし彼はキリスト教を、本物とにせ物との二つに割りきらうとする。「キリスト教思想では神と世界、神と人間、神と歴史、無限と作られたものの有限の間には本質的な断絶がある」と彼は主張し、パウロを引合に出しながら、芦花にはこの断絶がない、彼の道はキリスト教的神への道ではなくて汎神論への道であると説

く。「十字架なしのキリスト教思想はありえない」などと大きな顔をもする。しかしキリスト教思想キリスト教思想というのが大体おかしいので、純粹な福音的正統的立場からいえば、キリスト教思想ではなくて、キリスト教的信仰というべきなのであるが、それはそれとして、純粹な立場を設定し、その上にたって、これは不純だ、あれも不純だと論ずるやうかたは、書はあっても益はきわめてすぐないと言わねばならない。今日日曜日の朝の礼拝に、全国各地の教会堂に集るクリスチヤンのうち、誰と誰が本物で、誰と誰がにせ物なのだろうか。また、神と世界、神と人間との間の断絶を確信している者もしくは確信していることを表明したものだけが本物で、それ以外はにせ物なのか。

勝本清一郎は、「芦花の前半生のキリスト教思想が本質的にはすこしもキリスト教思想でなかった」といっており、そのあとで「黒い眼と茶色の目」を引合に出し、「この小説は本質的にはどこまでも世俗的小説である。キリスト教的思想、キリスト教的恋愛、キリスト教的生活実践、キリスト教徒特有の心理といった内容はない。同志社のかわりに慶應義塾を舞台にしても成り立つ小説である」と述べている。

つまり彼は、キリスト教の理想の姿を心に描いていて、その理想に達しないものには、片っぽしから「世俗的」というレッテルをはつてしまふのである。彼は同志社と、同志社の所属している組合教会と、同志社の創立者である新島襄のキリスト教が、多くの不純な要素を含んでいると見、世俗的であると見、そういう観点に立つて同志社も慶應も同じだといつてるのである。まことにお粗末な議論というほかはない。

筆者である私は幼い時から日本基督教會にぞくする教会の中で育つたが、日本基督教會は、日本のすべての教派の中で自らをもつと純粹であるとみなし、そのことに誇りをいだいている教派であった。私自身も学生のころはそのように信じ、世俗臭の強い組合教会を軽蔑し、同志社など果してキリスト教主義の学校の名に値するかどうかと疑っていた。日本基督教會派の牧師の中には、今日の勝本清一郎と似たような調子で、福音的キリスト教と、似て非なるものとの区別を力説し、リベラルな信仰や、キリスト教的ヒューマニズムをこつぱみじんにやつづける人がいて、そういう人の説教を、私は感激してきいたおぼえはあるが、今日の私はキリスト教をただ純粹の度合だけでは敬意を表さないようになっているし、逆にキリスト教的ヒューマニズムを、それはそれとして尊重し、高く評価するようになってきている。

キリスト教的ヒューマニズムは、新島襄の同志社の中に生きていたし、芦花はそれを同志社を通して、あるいは彼が十四才のとき受洗した母親を通して身につけたであろうし、それは「思出の記」のような健康な文学をうみ出す下地となつたのである。

芦花の若い時代のキリスト教的ヒューマニズムが、後年の「謀叛論」の基底になつていることもまちがいのない所だと私は考へている。